

『#聞け、天の声を -太平天国始末記-』（竹中愛語著）を読んだ。著者は歴史学者、文学博士。京都女子大学（文学部）非常勤講師。

19 世紀の中国に実在した宗教国家「太平天国」について歴史家が記述した歴史小説である。時系列に沿って淡々と描かれていて読みやすい。主人公は「太平天国」の教祖となった「洪秀全」。幼少時に優秀であったため、科挙合格を周囲から期待され、勉学漬けの生活を強いられるが、試験に 3 度失敗する（約 10 年間）。その結果、生まれ故郷に居場所を失い、親友とキリスト教を下敷きにした宗教を立ち上げる（ほとんどキリスト教の知識はないのに）。僻地で布教活動を行ったところ、意外にも貧しい民たちの救世主となり、宗教国家を作り上げる。当初はキリスト教の理想国家を目指していたのが、いつの間にか指導層の権力闘争に変質してゆく。後半は、狂気と猜疑心で互いを殺し合う有様が書き連ねられ、権力を獲得した人間のおろかさばかりが見えて来る。主張は平等の世界を実現であったはず（宗教を通して）が、辿り着いたのは権力を持った者たちの狂気の世界となった。この姿は後に同じことを主張して戦った（マルクス・レーニン主義を通じて）毛沢東にそっくりである。歴史は繰り返す。

太平天国の乱は、1851 年に清で起こった大規模な反乱。洪秀全を天王としキリスト教の信仰を元とした組織太平天国によって起きた。辮髪を切った（これは清朝への反逆を意味し、官僚に見つかると死刑）長髪賊の乱ともいわれる。洪秀全は科挙に失敗し病床に臥せていたとき、その間不思議な夢を見る。その夢とは、上帝と思われる老人から破邪の剣を与えられ、またイエスらしい中年の男性から妖を斬る手助けを受けたというものだった。洪秀全は病が癒えてからプロテスタントの勧誘パンフレット『勸世良言』を入手し、以前に見た不思議な夢の意味を「理解」し、キリスト教に目覚めることになる。洪秀全はキリスト教の教えの中でも特に上帝が唯一神であることを強く意識し、偶像を破壊し、ただただ上帝だけを崇めることを求めた。そのため郷里広東省での布教活動は、一族と数人の賛同者を得ただけで成功しなかった。洪秀全は効果的な布教方法を模索せざるを得ず、「原道救世歌」や「原道醒世訓」という布教文書を著した。

1847 年、金田村において、布教活動を行い約 3 千人の信徒を獲得した。参加者は、炭焼き・貧農・鉱山労働者・客家などの低階層が中心であった。単なる宗教的熱意や倫理を説くばかりでなく、現在の生活でのメリットを強調すること

で多くの信徒を獲得した。しかし組織の拡大は、公権力やその土地の有力者との摩擦を生じさせた。成員の逮捕が相次ぎ、洪秀全はそれまでの宗教活動から政治革命へと踏み出すことを決意する。軍事組織を結成した。そこでは厳しく男女を別ち、それぞれ男営・女営に入営させた。金田村に集結した人々は1万から2万といわれるが、それでも数倍もの清軍を打ち破り、革命の火蓋を切った。国号を太平天国とし、洪秀全は自身を天王と称した。官制や官爵などを決め、国の体裁を整えた。この時に天王の下の方幹部を決定した。

アヘン戦争、アロー戦争の最中、大衆を吸収して膨れあがった太平天国軍は清軍を何度も打ち破った。その過程で理解者である南王馮雲山と西王蕭朝貴が戦死した。この二王の戦死は太平天国首脳間の力関係を微妙に変化させた。太平天国軍が最初に陥落させた武昌で、多大な金銀財宝を得た。そして楊秀清（五幹部の一人）の意見により、南京方面を目指すこととなった。南京を陥落させ、ここを天京と改名し、太平天国の王朝を立てた。匪賊を吸収しても軍内の規律は厳正で高いモラルを有していた。少なくとも南京建都まではその傾向が強かった。

南京に入城後、太平天国は即座に制度の整備に着手し、まず天王である洪秀全以下の五王は場内に壮麗な宮殿を築いた。前期太平天国は、洪秀全と楊秀清の2人が主体となって運営されていた。宗教的権威を担っていたのがキリストの弟たる洪秀全で、実務を担っていたのが楊秀清であり、両者は君臣関係にあった。しかし、一度楊秀清に「天父下凡」が起きると両者の立場は逆転し、君主たる洪秀全が臣下の楊秀清に厳しく罰せられることになった。

太平天国は皮肉にも支配領域を安定させた途端、内紛が生じて弱体化し、金田村で決起した時の主要人物は洪秀全1人となった。しかし太平天国の命運がこのまま尽きることはなく、五幹部らに代わる有能な将軍が幾人も輩出し、もうしばらく存続する。

その後、天京は孤立した。諸王は既に洪秀全を見捨てていたが、諸王のひとりが清朝の囲みを破って天京に舞い戻った。そして洪秀全に天京を破棄することを勧めたが、洪秀全は頑として受け入れなかった。孤立した天京は食糧事情がすでに逼迫しており、雑草を食べていたほどであった。首都でありながら、防衛にあたるべき兵士が暴徒化し、1864年、洪秀全は栄養失調により病死した（この教訓は毛沢東には活かされなかった）。